
ノーマルorスペシャル

橘 林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノーマルオースペシャル

【Nコード】

N0168B

【作者名】

橘 林檎

【あらすじ】

ある青年の日常をとりまく平凡かつ特別？な出来事。笑いあり？涙あり？青春恋愛活劇。大人の階段のぼるお年頃物語。なんだか考えがまとまらない内に書きだした見切り発車小説。色々いたらないところがあると思いますが、御了承下さい。評価、コメントの方もできればよろしくおねがいします。

プロフィール

はじめまして。

末村　　ぢゅん（みむら　　ぢゅん）です。一応この物語の主人公らしいのですが、平凡極まりない男でございます。

知性は中の下。

スポーツは中の中。

顔にいたっても特徴なし。中の上くらい。メガネかけてる。

趣味…オシャレ　　特技…なし

夢、希望なし。世の中に不平不満あり。

平凡なんか嫌だー！！人とは違う生き方がしてえ！

とは一応いったものの作者の気分しだいで二転三転することがあるのでゆるしてください。

平凡と思ってるのなんか自分だけで、周囲のみんなも大体は自分が平凡で周りは特別と思ってたりするのです…。

さてさて、この物語はどう進んでいくのでしょうか？

学校生活

『ピピピピ…』

うるさく鳴るケータイのアラーム。寝惚けながらもアラームを止めて体を起こす。

「ふあゝっ!!」

背伸びをしながら欠伸をする。時計の針は朝の6時をさしていた。いつものように学ランに着替え、洗面所へむかい身だしなみを整える。

キッチンへいくとテーブルの上に菓子パンがおいてあったのでそれを手にとりカバンを持って玄関へむかう。

茶色いコンバースのオールスターハイカットを履いて自転車にまたぎ家をでる。

俺は公立高校に通う1年だ。

一応進学校ではあるが進学校の中でもレベルが一番低く対した大学にいけない、就職もパツとしない中途半端な学校だ。

俺の家から学校まで50分程かかる。軽快にペダルをこぎながら菓子パンを頬張る。

特別声をかけられない限り知り合いや友達がいても話したりはしない。

朝はめっちゃテンションが低いので誰ともはなす気がおきないのだ。

そんなことをいつてるまに学校についた。いくら50分だといっても文にしたら短いものだが、そこは気にしないでおく。

自転車を駐輪場におき、下駄箱で靴をはきかえる。

周りでは、ひっきりなしに挨拶がかわされているがテンションの低さゆえにスルー。

教室へ着くと自分の席へ腰掛ける。

真ん中の列の一番後ろの席で良くも悪くもない席だ。

周りは挨拶や雑談してるなか俺はまだボーツとしてボケツとしている。

決して友達がいらないわけではない。話しかけてこないで、話しかけないのだ。頭の中の俺がようやくベッドから起きたところで、

「ぢゅん、おはよう」

「ああ、來未か…おはよう。」

「來未か…じゃないわよ。あんたボーツとしすぎよ！シャキッとしなさい。」

「…無理だ。」

と答えた。たん背中を平手打ちされた。

おかげで目が覚めてきた。來未は、

「目が覚めたでしょ？」

とかブツブツ言ってた。

コイツは山田 來未（やまだ くみ）

出るところ出て引つ込むところは引つ込んでる女。色が白く、黒髪の背中くらいまでのロングストレート。

まあ、可愛いより綺麗な感じの女だ。

高校に入学してからずっと隣の席で、かなり馴れ馴れしく入学当初から話しかけられ、いつのまにか仲良くなっていた。当然のごとく今も隣の席だ。

「ねえ、ぢゅん。誰にブツブツ私の事はなしてんの？」

「ん？読者だ。」

「読者だ。ってサラッと答えられても意味分かんないよ！！」

「ふっ…おこちゃまは知らなくて良い世界さ。」

また背中に平手打ちが飛んできた。

ちなみに來未は空手部所属で中学で全国出場したらしい。力は俺よりかなり強く、この女より俺のが弱い。

あまりの痛さに声がでなかった。
來未はというと鼻唄をうたいながら授業の用意をしていた。

「朝から激しいドメスティックバイオレンスだな、ぢゅん。」

「ああ、平くんか。おはよう。」

「毎朝、ぢゅんのこんな姿見てる気がするよ。大丈夫か？」

「大丈夫だよ。おかげで目が覚めるしな。」

こいつは不二井 平（ふじい たいら）

頭脳明晰（学年トップ）

スポーツ万能（サッカー部1年にしてレギュラー）

容姿抜群（月1ペースで告白される）

背高い、足長い、スリム、綺麗な顔立ち。素晴らしいイケメンくんです。

こんな完璧人間と仲がいいのは出席番号が前後で、平くんから話しかけてきたのがキツカケだ。

クラスの委員長でもあり人気者だ。

設定が俺と差がありすぎだ…（泣）

「ぢゅん、何泣いてるんだ？」

「いや、平くんの完璧ぶりを読者に語るうちについ涙が……」

「ぢゅん、読者ってな……」

「平くん、その流れ一回私の時やったわよ。」
來未が横から口を出した。

「そうか……」

平くんは困った顔をしていた。

そんな話をしているうちにチャイムが鳴り授業がはじまる。

そして俺は、授業開始早々に來未の方を向き眠りについた。
來未はぢゅんの寝顔を可愛いと思いつつも授業をつけるのであった。

昼休み

「ぢゅん、ぢゅん！起きなよ。もう昼休みだよ！」

目をあけるとグループになって食堂へいくもの、1人で弁当食べるものの姿が見えた。

「あんた寝過ぎだよ！まだ1時間目の教科書のままじゃん。」

「來未か…おはよ…」

「おはよ…じゃないわよ。ほんと、あんたは何しに学校きてんのよ？」

「何って、睡眠とピチピチ可愛い女の子を見にきつ…ぐはっ！」

來未の拳が俺の脇腹に撃ち込まれ、俺悶絶。

「黙れ！！エロ！変態！サイテー！」

「おい。ぢゅん飯いこうぜ…って大丈夫か？！」

「た…平くん、大丈夫だよ。慣れっ子だから。」

「はいはい。ぢゅんも平くんも早く食堂いくよ！」

『はっ…はあゝい。』

そんなこんなで食堂に到着すると、隅っこの席にすわっていた優さんが俺に手をふり近寄ってきた。

「ぢゅんちゃんおはよー。」

「優さんおはよ。また昼休み登校？」

「そだよ。目が覚めた時の気分でくるもん。」

「そんなんだから留年するんですよ。一緒に進級しましょ」

「わかつてるよ。ちゃんと明日からはくるから。」

「この人は間宮 優さん。年齢的には1歳上だが精神的には3歳くらい上のように感じる。学校に全然こなくて2回目の一年生をしている大人チックでぐーたらなお姉さん。色白で身長は一般女子並み、ミルクティーのような髪色のボブヘア。可愛くもあり時には色気があり不思議な人だ。」

「説明的な紹介ありがと。」

「あつ！來未ちゃん、平くんおはよ」

『おはよー。間宮さん。』

「後、優さんは絵の天才で、幼いころから描いた絵はかなり高額な値で取引されるほどである。」

「ぢゅんちゃん説明はもういいからご飯買いにいこ」

「そうつすね。んじゃ、いきますか。」

こんな感じで4人で昼飯をたべ、昼休みを満喫した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0168b/>

ノーマルorスペシャル

2011年1月4日14時07分発行